

地域連携をもっと身近に地域貢献をもっと高める 就労移行支援事業所の取り組み

○小川 大輔（ウェルビー株式会社 ウェルビー千葉駅前第2センター 就労支援員/主任）

1 はじめに

就労移行支援事業所は、就労を希望される障害者に対して就労定着へ向けた訓練及び相談支援を提供する場所である。支援を提供する上で様々な支援機関や医療機関との連携が求められる。例えば、利用者の支援方針を立てる際や、メンタル不調の際には関係機関とケース会議を実施している。

利用者の就労支援においては、1つの事業所の視点だけではなく、多角的なサポートが就労定着に反映すると考えられる。

弊社のスタンスにおいては、利用者を取り巻く支援機関同士を繋げるファシリテーターとなり、多角的な視点を持って利用者の就労支援を行っている。

2 会社概要

ウェルビー株式会社は1人でも多くの障害者に、成長と活躍の場を創出したい。そして、ボランティアではなく事業として携わることで、障害者の方を継続的に支援していきたい。そんな思いから社会問題をビジネスで解決するソーシャル事業の立ち上げに至る。2012年4月、船橋市の西船橋駅近くに西船橋駅前センターが開所。現在は101のセンターがあり、全国の障害者に対してサービスを提供している。

また、障害のある方への就職支援を行う就労移行支援事業を柱に、児童発達支援事業、放課後等デイサービス事業、相談支援事業、定着支援事業を展開している。

3 本モデルに取り組んだ経緯

はじめにでも記述したように、多くの支援機関の方々と連携を取らせて頂いている。

その過程の中で支援機関の方々も当事業所の意見を求めている部分を感じる場面が多々あり、支援者同士お互いの知見をもっと活発に交換できる場があると良いと考えた。この経験を元に、様々な支援機関が関係性を構築するための交流出来る場を作れないかと思い行動に移すことにした。

更なる想いとして、1つの事業所の視点や知識だけでなく、複数の機関の視点や知識があることにより、各支援機関の支援力向上にも繋がれば良いと考えた。

支援機関に足を運び交流会への参加を呼び掛けた結果、多くの賛同を頂き、他の支援機関の職員も私と同じように

交流の場を求めていることが分かった。

この取り組みに、数多くの支援機関に参加して頂けるように会議の名称を多職種連携会議とした。

4 多職種連携会議で話し合ったテーマと気付き

(1) 第1回テーマ<就労移行支援事業所の困難事例>

第1回目のテーマを決めた理由として、就労移行支援事業所を知ってもらう上で、何に困っているのかを知ってもらう所から開始した方が、皆様の認識を高められると思った事と、違う角度での視点からの助言を伺いたいと思い決定する。

表1 就労移行支援事業所の利用者様の困難事例

氏名	A氏
年齢	30代
性別	女性
診断名	うつ病、アルコール依存症
ニーズ	安心した環境で就労したい

【A氏の具体的な困難事例】

他者の振る舞いに過敏で、過度な怒りを抱えてしまう。結果多量の飲酒をして希死念慮をほのめかす電話を繰り返す。

【会議で挙げた意見】

- ①クライシスプランの活用はという意見が挙げた。クライシスプランとは「症状悪化のサイン」と、その対処方法などを一覧にした計画表である。
- ②不調のサインの中に睡眠時間の乱れがあった為、睡眠時間に応じた調子の自己管理を促す事も有効ではと意見を頂く。

【支援結果】

A氏にクライシスプランと睡眠時間の自己管理を意識してもらうことにより、感情的になる回数は減り、過度な飲酒による連絡も無くなった。

(2) 第2回テーマ<各支援機関の基本的な役割>

第2回目のテーマとして選んだ理由は第1回目が出た意見として、就労移行支援事業所の基本的な役割について、皆様の関心が高かった為、他の支援機関の役割についても知れる機会があると有意義ではないかと考えて決定する。

参加頂いた機関として、グループホーム、相談支援事業所、特別支援学校等になる。

出た意見で印象深かったのは、グループホームにおける話にて、事業所毎についての料金形態や、区分に対する考え方を聞き、今後利用者が検討した際に、大きな指針となると感じた。全体的に率直な質問や疑問を話し合い、今後の連携を模索出来たと思われる。共通の課題として、8050問題だけでなく、7040、6030問題も同時に考えていく事も重要だと気付かされた。第3回のテーマとして繋げていく。

(3) 第3回テーマ<8050問題、家族支援の困りごと>

前回のテーマを踏襲して(3)のテーマについて話し合いを行う。今回は8機関参加頂く。より、密な話し合いが行えるように、Aグループ、Bグループに分かれて話し合いを実施。その中で、問題毎に着目する点が違うことが分かった。

ア 80に着目した困り感

親亡き後の福祉の緊急性の高さや、支援機関の役割の認知が薄いと言う話に重きを置いて意見が出た。

イ 50に着目した困り感

長らく引きこもりしており、医療の緊急性も高い方が多く居るが、本人の危機意識の薄さや、楽観的視点が強い為、福祉に繋がり辛い場合が多い。

ウ 家族支援の困りごと

共依存という言葉が1つのキーワードであり、社会から孤立している期間が長ければ長い程、深く強くなるのではないかという考察をした。

エ 今後に向けた解決策

様々な側面を検討した結果、幼少期から福祉の認知を高める動きを、支援機関が連動して行う事が重要ではないかという意見が出る。さらに居場所づくりのお手伝いを、段階毎に行っていき、社会から孤立しない関係作りの必要性を考えるに至る。

オ 総括

親子間の困りごとを話していく中で、「共依存」や、「非現実的な解釈、認識」が意見として挙がってきた。改めて重要な事として、様々な関係機関との関わりから、相談先を支援者がどれだけ把握しているか、促しが行っているのかが大切だと分かった。また話をしていく中で内容は違えど、根幹は近い困り感を共有出来た事は大きな学びとなった。

5 多職種連携会議からの学び、今後の課題

現在3か月に1回のペースで多職種連携会議を実施した結果、様々な学びを得ることが出来た。支援機関が変われば視点の違った質問や、新鮮な回答があり、大きく見識が深まったように感じた。印象的だった質問の中に、「困っ

た事は何か」という投げかけがあり、個々が困りごとを共有すると、同じ困り感がある支援機関が居る事により、共感から安心感に繋がった事も分かった。

6 今後の課題

今後の課題としては、テーマの設定と、継続性と考えている。理由は、参加する支援機関が異なることにより、共通認識で話せるテーマが限られてくる為、どのように設定していくべきか考えていく必要がある。それに付随して、継続性すなわち参加したいと思って頂く努力も大切になってくるのではないかと考える。

7 多職種連携会議で得られた参加者からの意見

第3回を終えて、継続参加頂いている方や、新規の参加者の方がいる。皆様が多職種連携会議の参加を通して感じて頂けるメリットとしての意見を紹介する。

- ①新たなネットワークの構築が行えている。
- ②距離感の近い話し合いが出来た事により、機関毎の認知が深まった。
- ③初めて知った支援機関だが、ぜひ相談したい方がいる。
- ④会議参加後に、連携する事案もあったと共有頂く。

8 まとめ

就労移行支援事業所だからこそ出来るネットワークの構築に留意して取り組んだ結果、新たな関係構築の助力が出来たのではないかと考える。また我々の立場は利用者の安定就労の為の支援という事も忘れてはならない。自身が得た知識を、支援の中に反映させる事も大きな役目と捉える。今後は生活、就労、居住に関わる機関の連動から、支援のモデルケースになるものを考案していきたいと思う。

最後に、多職種連携会議を通じてお互いの立場を理解した上での情報共有を行うことが出来、支援に厚みが増したと実感をしている。

【連絡先】

ウェルビー株式会社 ウェルビー千葉駅前第2センター
主任 小川 大輔
e-mail : d.ogawa@welbe.co.jp